

「底が突き抜けた」時代の歩き方 268

なぜ日本人はかくも不気味になったのか ― 真紀子外相の人気の謎

文芸評論家の福田和也が『新潮45』（01・7）で、『田中真紀子人気』を読み解く』と題して、「なぜ日本人はかくも不気味になったのか」という趣旨に即した一文を掲載している。「なぜ日本人はかくも幼稚になったのか」という題名の著作を物している福田氏からすれば、ここはやはり「不気味」ではなく、「幼稚」というべきであろうが、この「幼稚」は単なる幼稚ではなく、「歪んだ幼稚さ」を発揮している真紀子外相に共鳴するものである以上、「不気味」ともはや形容せざるをえなくなっているのだ。

真紀子外相の「どうしようもなさ」が前外相の河野洋平の「どうしようもなさ」と「格の違い」点について、こう指摘する。《イタリアのディーニ外相やオーストラリアのダウナー外相などにたいして、アメリカのミサイル防衛計画について独断で懸念を表明し、さらにはブッシュ大統領の石油業界とのコネクションや中国にたいする配慮までを語ったという。国益を損なっている、などというものではない。破壊しているに等しい。外交の現場を、中学校のESSレベルの弁論大会と取り違えている。そのうえ、この点を指摘した報道陣にたいして、発言を否定してごまかそうとしたのですから、何をか云わんや、というところです。これまでの派閥の勢力均衡で選ばれた外務大臣であっても、ここまで水準の低い、破滅的な人物はいなかった。》

同時多発テロ直後にアメリカ国務省の避難先をマスコミにバラしてしまったり、イランのハラジ外相との会談前に紛失した指輪の代わりを秘書官に買いに行かせて30分も遅刻した、という最近の「国益を破壊している」出来事をも、取りあえず付け加えておく。

そんな評価を下す彼の目には、《記者会見で、閣僚という立場にある人が「疲れた」などと、無神経に連発し、しかもそういう発言をすることで、何らかの同情なり、配慮なりを報道陣なり、国民なりに期待している》という《ある種の甘え》、その《甘えが必ず通るという傲慢さ》をさらけだした真紀子外相の公的な場での《異様さ》までが連なっている。

福田氏は京浜東北線の車中で、50を少し回ったぐらいの、たぶん本物の《ベージュ色のケリー・バッグを持ち、クリーム色のスーツを着て、かなり手間をかけたヘア・スタイルをしている（…）何と上品な人だろう、と思ってしまうような、そういう女性》が、扉にもたれてビニール袋に入ったパンを一心不乱に食べており、《食べ終わると、スカートの上におちたパン屑を払い、ビニール袋をハンドバッグに突っ込み、ハンケチで口の周りを拭い、手早く化粧を直すと、何事もないように扉の前を離れて、私の斜めに座った》という、一年前のその婦人の振る舞いの「不気味さ」と真紀子外相の行状とを重ねて捉える。《けして、他人の目を意識していないわけではない。それなりに上手に口をきくこともできれば、あるいは見場よく振る舞うこともできる。でも、他者との関係において、あるいは公衆を前にしていることにおいて、とてつもなく大きな欠落と

いうか、勘違い、嫉れがある。それは、人格全体からすれば些細なものかもしれませんが、しかしまた人間性の、根本における変化と考えざるをえないところがある》。

そこに、縫いぐるみを持って歩く田中康夫長野県知事の「歪んだ幼稚さ」も付け加えられる。《康夫氏が他者にたいして結構な気配りをする人であり、《人が居心地が悪かったり、あるいは不快だったりすることに敏感に反応をする人》であるその半面、《その田中氏がグルミットを連れて歩き、連れ歩くのはともかく、知事という立場にいながら、職員にその縫いぐるみとの戯れを見せつけるのは、どういうことなのか。》福田氏の憂鬱は、《電車の中なり、あるいはその外においてでも、他者がいるということ、つまりはそれなりに他人の意志を尊重しつつ、自分の了見を何とか通そうと四苦八苦する大人の世間、社会というものがあるということを認めようとしな（…）非社会的な子供たち（風体、年齢は大人ですが子供というしかないでしょうね）は、社会にしっかりと依存していて、それを疑問としない、むしろ生来の権利と考えている》ところに向かう。

福田氏は W 田中に共通するものを「歪んだ幼稚さ」と呼ぶが、社会的に未成熟の一言で片づけられそうな気もする。社会的成熟の拒否が W 田中に顕著であるということだ。ただし、国益の破壊というときの国益というものがどのようなものであるのかが全く明らかにされていないように、社会的成熟のもつ意味にも全く言及されていないが、従来の子ども - 大人観をそのまま無批判に受け継ぐ大人の一人である福田氏からすれば、彼らの「幼稚さの根源」を辿ることは、いとも簡単である。ユングがフロイトのエディプス・コンプレックスと対になるものとして作ったエレクトラ・コンプレックスに即して、真紀子外相はエレクトラの相貌をもち、縫いぐるみを抱える康夫知事はエレクトラの弟の役割をはめられる。

エレクトラもエディプスと同様に、ギリシャ悲劇に由来しており、ミュケナイの王アガメムノンとその妃クリュタイムネストラの娘エレクトラは、トロイア戦争から凱旋した父を謀殺した母とその情人アイギストスを生涯の仇として、弟と共に討つという筋立てである。エディプス・コンプレックスが、息子が愛着する母親を奪いあう競争相手として父親を憎悪する心理であるのに対して、エレクトラ・コンプレックスは、娘が愛着する父親を奪い合う競争相手として母親を憎悪する心理である。ここで父親とは社会に出ていくための壁であるから、父親乗り越えのエディプス・コンプレックスは社会的成熟を促すのに対して、母親に取って代わろうとするエレクトラ・コンプレックスでは、娘は娘の立場にとどまりつづけようとするので、むしろ社会的成熟は拒まれている。

《娘の立場から、父を思慕しつつけて、母と同一化することを拒み、むしろ母と母を奪った者を憎悪しつつけるのです。その憎悪は、強烈なものであって、父に対する忠誠を貫徹するためには、すべてを焼きつくしても飽かない。アイスキュロス版の『エレクトラ』（原題は、『供養する女たち』）では、自らがミュケナイ王国の王女という立場にありながら、元首である仇と母を殺すことにより、王国が混乱に陥り、崩壊の淵に至ることも顧慮しないのです。》こう書く福田氏の頭には、エレクトラ真紀子は父角栄が倒れるや否や、父親の長年の腹心であった早坂茂三らを追放することによって、父親の独占を妨げてきたさまざまな人々から父親を取り戻し、そして父角栄を倒れるまで追い込んだ者たちへの復讐に着手していく筋書きが、すでに描かれている。

父角栄が脳梗塞を起こして政治生命を断たれるきっかけとなる、竹下派の旗揚げに結集した角栄のかつての子飼いの政治家たち、竹下登以下、金丸信、梶山静六、小淵恵三、小沢一郎、橋本龍太郎、野中広務、羽田孜といった面々に対する真紀子氏の敵意は、総裁選の運動中に故人の小淵元総理について、「お陀仏さん」といって物議を醸したことで明らかである。もう一つの仇敵は、父角栄が刑事被告人となったロッキード事件を仕組んだアメリカである。福田氏によれば、真紀子氏は作為のあるなしにかかわらず、《アメリカに復讐をするためにこそ外務大臣になったといってもいいかもしれない》。アーミーテージ国務副長官との会合のキャンセルにしても、またイタリアやオーストラリア、ドイツの外相に対してアメリカのミサイル防衛網（NMD、TMD）批判を口にしたのも、《深い考えがあつてのことではなくて、内心の反米感情》の率直な発露かもしれない。

《意識的、無意識的を問わない真紀子氏の衝動は、その背景を考えれば一個人としては理解できないことありません。一人の娘としては、むしろ見事なのかもしれない。けれども、それをそのまま政治や外交にもちこまれてはかなわない》。更に、《氏の行動を見てみると、父角栄を闇將軍、金権政治家として葬った日本社会全体、さらにはその角栄の娘である自分を正當に扱わなかった日本にたいする強い怨恨感情を認めざるをえません。ゆえに、外務大臣となった田中真紀子氏は、晴れ晴れとして、好き勝手に振る舞って見せることによるこびを感じる。》いよいよ福田氏の筆鋒は、自分がもっとも気に入らないところになめらかに突き進んでいく。

《より問題なのは、こうした復讐意識と対になった君主意識です。旧田中派の政治家にたいする物云いの中には、怨恨意識とともに彼等にたいする一種の主君意識が滲み出ています。偉大なる父角栄の家来、手下にすぎないおまえたちが、なぜ、自分を無視してかくも大きな顔をしているのか、というような。この意識は、国民全般、とくに官僚にたいしてもあります。不世出の宰相たる田中角栄の娘たる自分は、いわば王女であり、王女として扱われるべきなのに、それにふさわしい扱いを受けてこなかった。ゆえに国民は自分の放縦を甘受すべきだ、というような趣きがうかがえるのです。》

《政治とは父のものであり、母のものであり、《たいした識見もないし、確信すらないのだけれど、とにかく生まれてしまった子供が充実した人生の一片を手にし、他者たちの間に何がしかの通じ合いをもって生きられるように、そのように世間を、社会を、国をあらしめようと発想するのが、政治の基本だと思》う福田氏にしてみれば、《父に、母に、あるいは先行世代からの強いこだわりをもちながら、現状にただ、破壊的な不満だけをもち、《怨恨と復讐感情から、今とりあえず機能し、人々の生活を支えているものを破壊してしまおうという愉快犯的な感情に憑かれている》ようにみえる《娘の、あるいは息子の政治》を行っている W 田中の乱行を、なにゆえ《国民が、ほぼ全面的に認めている》のか、不気味であり、理解に苦しむということなのだ。》

人は一度嫌いになったり、不審感を抱くようになると、他の異なる面をみることによって自分にとっての嫌な部分や不審感を和らげたり、是正するよりも、むしろより一層嫌いになり、不審感をますます募らせていく方向に突っ走るものであることが、福田氏の一文からよく伝わってくる。一言でいえば、嫌なものは嫌であり、我慢がならないこ

とは我慢がならないのだ。この頑固さだけはどうすることもできない。本来、文章を書くということは、自分が生身で嫌いになったそのことと、嫌いになってしまった自分の双方を同時に括弧に入れて、御破算で願いましてはの心境でそれから距離をとって、もう一度静かに辺りをねんごろに見回し、新たなまなざしを獲得しながら辿り直していくことによって、これまでと全く違った別の見方がおぼろげに浮かんでくるのを待つことであろう。そうでなければ、書くことは自分が嫌になったことや、不審感の根拠を一心不乱に固めていく怨念のような作業に堕してしまう。

田中真紀子、田中康夫両者を「怨恨と復讐感情」の権化のように論じる福田和也の手つきからも、彼らを支持している日本国民の不気味さに対する「怨恨と復讐感情」が、慨嘆に混じって認められなくもない。が、わからぬでもない。書くことは書きつつある自分をいかに深く解体するものであるかということは、やはり至難の業であるからだ。しかし、福田氏はW田中の「高慢と偏見」を執拗に指弾する自分自身もまた、裏返しの「高慢と偏見」に囲われていることを知らなければ、自分自身の枠組みから一步も抜け出られない。だからといって、もちろん、どちらもどっちだなどと腕を組むつもりは全くない。

さて、福田氏の文章運びからすれば、W田中の成熟を拒む社会的未熟さはまさにその通りという以外ない。彼がそのように書いているからだとしても、彼が不気味という日本国民も本当は彼らの未熟さに気づいているかもしれない。では、気づいているのになぜ彼らはいまだに支持されつづけるのか。問題は、彼らの社会的未熟さが国民に、とりわけ主婦層に愛されるのか、というところにある。福田氏は《父として、母として不様かつ不器用に負うことも出来ない責任をしょいこむことよりも、娘として、息子として、甘えの下で、現体制をとにかく壊せばいい、それによって、「父」や「母」が右往左往するのを見たいというのが、国民の要望なのだということになるのでしょうか》、と。まさにそうである。ただし、《政治とは父のものであり、母のものであると思ってい》るような、福田氏に代表される「古風」な考えかたで維持されてきた、これまでの政治のありかたに風穴が少しでも開くことを、男という「体制」に抑圧されている女性や、夫のだらしなさに振り回されている主婦たちはたぶん願っているのである。

福田氏はおそらく意識的に嘘を吐いている。政治はこれまで男の世界であって、父のものであったことも、まして母のものであったこともない。政治の世界に顔を出す母とはファースト・レディがそうであるように、内助の功として夫である男を常に引き立てる妻の役割程度でしかなかった。真紀子外相の政治を父角栄の娘としての政治からのみ覗くのも一面であって、女性や主婦たちが彼女に期待しているのは女や主婦の政治なのである。福田氏は父 - 娘、母 - 息子という言葉を持ち出すが、巧妙に男 - 女という見方は隠蔽しているように見える。彼の文脈に男 - 女の視点が導入されると、国益も社会的成熟も政治の基本も、また、西欧的なエディプス・コンプレックスだの、エレクトラ・コンプレックスがはたしてどこまで通用する図式であるかも、なにもかもその前提が問い直されねばならなくなり、彼の意図通りに描けなくなるからだ。その意味で彼の文章自体が、これまで固守されてきた政治の世界から放たれた政治的なマニフェストにほかならない。

2001年12月30日記